九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

臨床医と香具師の想像力 : セリーヌのパンフレ（２）

木下, 樹親

https://doi.org/10.15017/9994

出版情報：Stella. 17, pp.191-201, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

臨床医と香具師の想像力

―― セリーヌのパンフレ (2) ――

木　下　樹　親

セリーヌは誹謗文書『死体の学校』[1] を出版する直前，これについて前作「『戯言』の続編にして問題の結論」[2] をなすものだと語った。たしかにこの作品は反ユダヤ主義をいっそう強調した点で『皆殺しのための戯言』の「続編」の体裁をとっているし[3]，「ユダヤ人どもの奴隷のままでいるか，それともゲルマンにもどるか。選択せよ」[292] といった「結論」とおぼしき表現も含んでいる。それゆえセリーヌ自身による位置づけは当然のことといえよう。しかし両作品を注意ぶかく比較すると，彼の伝記作家フレデリック・ヴィトゥーとともに「『戯言』のあとで，セリーヌにはほかにいうべきこと，おし進めるべき新しい論拠があったのだろうか」[4] という疑問を抱かざるをえない。なぜならば『死体の学校』の大半を占めるフランス内外の実状分析の骨子は前作となんら変わりがないからである。またドイツとの同盟締結による戦争回避がこの文書のもっとも重要な提案だとしても，その萌芽はやはり『皆殺しのための戯言』のなかに確認できる[5]。そのうえこれらの主張は，明快とはいいがたい配列で構成された 105 ものセカンスにわたってくりかえされる。そこから浮き彫りになるのは，テーマそのものにもまして，これを執拗に変奏しつづける作者の怒りと憎悪であろう。それらの激情を文章化するにさいし，セリーヌは臨床医と香具師の観点からの想像力を駆使したように思われる。これはパンフレ期に培われ，以後の小説で活用されていくテクニックであるが，本稿では『死体の学校』に対象を絞って，2 つの想像力の様相について考察したい。

*

セリーヌの本職は医者である。そして彼の小説はつねに実体験にもとづく自

伝的虚構であるから，ほとんどの主人公が作者の分身たるべくこの職業に携わっている[6]。そのため医者の目による人間・社会考察は，『夜の果てへの旅』できわめて効果的におこなわれた例をあげるまでもなく[7]，セリーヌのバックボーンのひとつだといってよい。この観点は小説とは異なる性格をもつ誹謗文書においても失われてはいない。じっさい『死体の学校』でも，作者は「私は私なりにちゃんと病状の見通しを述べることができる，私は医者だから，その権利があるのだ」[79] と自己規定している。では臨床医の思考はこの文書でどのように反映されたのであろうか。

『死体の学校』におけるセリーヌは反ユダヤ主義よりもさらに過激な人種主義を力説した。これは医者から人類学者に転向したジョルジュ・モンタンドンの学説の影響下で示された態度である[8]。セリーヌによれば，人種主義宗教にほかならないユダヤ教の信者たちはみずからを絶対的優越者と位置づけ，アーリア人を奴隷状態におとしめている。この現状を打破するには，たんにユダヤ人への反対を叫ぶのではなく，彼らをフランスから完全に追放しなければならない。そこでユダヤ人こそ最低の劣等人種だという認識を深く浸透させ，アーリア人による人種主義を確固たるものにする必要があると説いたのだ。この説明の過程でセリーヌはユダヤ人への処し方を手術に臨む外科医の義務にたとえている――

> 外科医が善玉菌と悪玉菌を区別するか？ 手術局部にはびこらせておく細菌，不活性細菌，「毒性のないもの」，無害の非病原菌と，きわめて深刻な事態や致命的な敗血症を避けるため，ただちに除去し，煮沸消毒して，徹底的に破壊しなければならない病原菌との区別を？ 否である。そんな態度はおろかで，災いのもととなるだろう。外科医は手術の前にすべての器具を煮沸にかける，しかも1分間とか，ほんのちょっと，なんとなくじゃない，したふりなんかしやしない，じゃなくてたっぷり20分間加圧して，きわめて細心綿密におこなうのだ。外科技術のイロハである。
>
> 細菌のあらゆる点が謎めいてるのは，ユダヤ人のあらゆる点が謎めいてるのといっしょだ。昨日はかくもおとなしい細菌が，かくもりっぱなユダヤ人が，明日は猛威をふるい，耐えがたい苦痛をもたらし，すさまじい災禍となるかもしれん。何人たりともある細菌がどうなるか，あるユダヤ人がどうなるかを保証することはできない。なにがなんだかさっぱりわからんのだ。[261]

あらゆるユダヤ人を危険きわまりない病原菌とみなすこと。これがセリーヌの

人種主義の出発点である。このバリエーションは，たとえば「まさにほんもののガン，腫瘍」[33] とか「われわれにとって同化できない寄生虫」[215] など，枚挙にいとまがない。いずれにせよセリーヌは，ユダヤ人を人体に害をおよぼす異物だと診断し，徹底的に排除すべきだと主張したのだ[9]。もっともこのようなユダヤ人観はさほどめずらしいわけではない。というのも，第2次世界大戦を目前にしたフランスでは人種的偏見にもとづく，ユダヤ人への漠然とした不安がたしかに広がっており，ことばと表現のちがいこそあれ，彼らを正体をつかみにくい不気味でいまわしい存在だと考える反ユダヤ主義者は増加していたからである。その意味で，ポール・キングストンが指摘したとおり，セリーヌのユダヤ人描写は当時の反ユダヤ的カリカチュアの原型だといってもさしつかえあるまい[10]。

しかし臨床医セリーヌが診察したのは病原菌それ自体ではない。それに冒された患者，すなわちフランス人のほうである。概してセリーヌのパンフレはユダヤ人誹謗の激しさにのみ注意が向けられがちだが，じつは彼の同胞もひじょうに厳しい攻撃の対象となっている。ときには反フランス主義文書とよびうる部分さえあるほどだ。じじつ『死体の学校』でのフランス人のカルテにはつぎのような容態が記載されている——

> ケタはずれの規模で，怒涛のごとく押しよせ，ギャンギャン騒ぎたてるユダヤ・カーニバルに身を投じ，のめりこんだ異教徒は完全に分別を，分別のかけらさえもなくしちまった。もうピクリともしやしない。自分が存在してないんじゃないかなんて思いもしないのだ。〔…〕おまけにユダヤっぽくないものがあるだけで，野郎おそろしく倒錯してやがるから，たてついて，むかって来るかもしれん，それほどなにからなにまで，説きふせられて，ユダヤ人になっちまったのさ。あらゆるものが野郎のもとに外界からいつも届くが，そいつは容赦なく，まちがいなく，どうしようもなくユダヤのだ。やつはもはやユダヤ人の意のままに動く夢遊病者でしかない。[26-27，傍点引用者]

セリーヌは，フランス人がユダヤ人による支配から脱却しようとするどころか，むしろその奴隷状態を甘受して心身ともに倒錯の極みにあると断定している。先述の比喩をもちいるならば，フランス人は病原菌にすすんで感染し，病状を悪化させている，と換言できようか。かくしてセリーヌは母国をユダヤ人

の「最低の植民地」[292] と，また同胞を「土着賤民」[28] と呼ばざるをえない。彼の人種主義的観点からすれば，この状況はまさに主従関係の逆転で，屈辱以外のなにものでもないであろう。傍点部分の原語«le Goye»は『皆殺しのための戯言』にも頻出しているが，「ユダヤ教徒から見た異教徒」を意味する語であって，あくまでも前者に比重がおかれる。この語をもちいることじたい，両者の関係への作者の苦々しい思いが如実にあらわれている。

ところで，引用文では同胞へのはげしい憤りが叫ばれるものの，その根拠や背景は明白に述べられていない。セリーヌはいかなる点においてフランス人が堕落しユダヤ化の一途をたどっていると考えたのであろうか。それを示唆するのが，『死体の学校』でキーワードのひとつとしてもちいられたことば「はらわた tripe」である。セリーヌのいう「はらわた」とは，深奥にあるもっともおぞましいものの象徴で，人間の本質的な醜さをあらわす。彼はつねに嫌悪の対象であるこのことばをもちいて，同時代のフランス人が帯びている2つの傾向，すなわち物質主義の蔓延と戦争への欲求とを糾弾した。前者は，功利主義と金銭崇拝にとりつかれたフランス人がより豪奢なものへの所有欲をむき出しにしている状況だといえよう。セリーヌはシャイロック流のがめつさを発揮する同胞を，手あたりしだいになんでもむさぼって肥大する「はらわた」と呼んだ[11]。そして物質の豊かさが必然的に精神の貧困をまねくことを批判し，「フランスはてめえのはらわたのことばっかり考えてくたばるのさ」[106] と予言したのである。いっぽう後者にかんしては，民主主義体制があらたな戦争の勃発を待望していると考えた。民主主義体制とは，ユダヤ人とそのモルモットたるアーリア大衆を意味するのだが[12]，この大義名分でおこなわれる戦争はユダヤ人の利益にしか結びつかず，戦場に赴くフランス人はみずから死をもとめているとしかいいようがない。そのため「フランス兵士の律儀なはらわたは，世界でもっとも勇敢なはらわただけど，その皮さえもう見つけられなくなっちまうぜ」[56] と述べて，好戦的なフランス人の愚直さを嘲笑したのだ。

このような現状把握にもとづいて先の独立引用文で示した診断書が作成されたのだが，2つの「はらわた」のうち，作者にとって特権的でより現実感のあるものはむろん後者である。というのも周知のとおり，彼は従軍・負傷した第1次世界大戦での恐怖と不条理の体験を『夜の果てへの旅』で活写して以来，一貫して反戦主義の立場を表明しつづけたからだ。四分五裂して無惨な死体と

化した兵士のイマージュが彼の文筆活動の推進力のひとつであったといってもけっして過言ではあるまい。それゆえ，近い過去の大戦で辛酸をなめつくしたにもかかわらず，ふたたび殺戮への道をひた走る同胞にたいし，「なによりもまず戦争を避ける」[82] ように訴えたのである。

しかしセリーヌはこの意見が受けいれられないであろうことをじゅうぶん承知していた。それを悟ったのも，じつは診療の経験に由来する。彼は，医者がくりかえし丁寧に処方を説明しても，患者はそれをまったく無視して自己流で薬を摂取し，その結果不調になるや，医者に責任を帰して猛然と非難しに来るというのだ。どんなに努力しても，「人々は諸君をいつも，いつも，誤って理解」[211] するうえ，恩を仇で返すだろう。説得することの困難を痛感したせいか，この臨床医は医者らしからぬセリフを口にする——

> じゃあ軍隊付外科は？ 緊急輸血はどうかね？ 諸君は「輸血」学という最新用語を知らんのか？ 戦闘する人間動物は，戦ってるその場所で，合理的に，あっという間にできる輸血の最新技術のおかげで，たいていのばあいもう死ななくてすむんだぜ。ほんとさ。さっと血液を補充すりゃいい，こんなふうに，戦闘中に，傷口がまだ開いてるところに，生血か「保存用」血液を，時間，条件，死体の状態に応じて。そいつを生きかえらせてまた戦わせるのさ。兵隊の効率はこの発見のおかげで，いちじるしく改善される。白兵戦は荒れるぞ！ 14年の時より，10倍，20倍もよくなる！ 輸血のおかげで！ 第1帝政時代より50倍もな！ [248-249]

一読すると，かつては死を待つ以外なかった重傷兵が輸血技術の発達によって危機を脱する可能性が高くなったことを称賛する文章に見える。しかしその延命治療は彼をふたたび死にむかって突撃させるためのものなのだ。また「人間動物」や「補充する」という表現からうかがえるように，この医者は兵士を単純かつ矮小な道具とみなしている。戦場においては，医学も医者も非人間性を身にまとう——この残酷な現実を患者に配慮することなく突きつけるとき，セリーヌはほとんど悪徳医師の様相を呈しているといえるだろう。

いやこのときだけではない。もとよりセリーヌのことばには刺がありすぎるのだ。ユダヤ人とフランス人の診断にしたところで，単純な偏見を過剰なレトリックで粉飾したことは否めないし，患者をいたわり同意や共感を得ようという姿勢も認めにくい。彼は相手を怒らせようと絶望のどん底につき落とそうと

おかまいなしに，ただ言いたい放題をまくしたてたのだ。その開きなおった態度には，臨床医とはあきらかに異なるもうひとつの存在がかいま見える。それを本稿では香具師と呼びたい。じっさいセリーヌの診察室での診断は芝居小屋での口上にもなりうるのである。

これはけっして無謀な比喩ではない。先述したとおり，セリーヌはフランスがユダヤ人たちの支配下にあると考えていた。彼らは支配者の座に君臨しつづけるために，たび重なる迫害を不屈の精神で乗りこえて前進する麗しき民族であることをさまざまなメディアをとおしてアピールしている。だがそのプロパガンダについてセリーヌはいう——

> 世界規模のユダヤ芝居——らっしゃい！ らっしゃい！ 見においで！「イスラエルのおそるべき不幸と驚嘆すべき美徳」は場内超満員だよ。よく考えてみるとこれが現在大当たりの，ほんとに大衆受けしてる唯一の見世物さ。〔…〕大勢参加しに来るかって？ 身も心も捧げるさ！ 中世の聖史劇だって，こんなにまじめで，おとなしく，熱心で，あっけにとられる連中を集めたことはなかったんだぜ！ 民衆が「おそるべき不幸」に殺到するかって？ 飽きずにアンコールさ！ そいつで死のうとしやがる！ 熱狂のあまり自殺しちまうぜ！
>
> どんな端役だろうと，極悪の人殺し役だろうと，あいつらやらせてくれってわめきやがる，でたらめじゃねぇよ！ 本当さ！ うるせえったらありゃしねぇ！ やつらはあらゆる戦闘，あらゆる虐殺のためにいるのさ！［109–110］

世界の状況はユダヤ人によって巧妙にしくまれた芝居である。情報操作の結果，フランスの民衆は率先してその芝居小屋へ足を運んでいる。もちろん観客としてだけでなく，いくらでも交換可能なエキストラとして。セリーヌはフランス人がユダヤ人のための戦闘に勇往邁進するさまをこう読みかえた。そして同胞がそれほどまでに「たちの悪いマゾヒズト」［136］ぶりを発揮しあうのならば，彼らを徹底的に罵倒することで，その被虐嗜好を満足させてやろうと，愛撫とも虐待ともとれる屈折した攻撃を展開したのだ。いわば，現在開演中のユダヤ芝居に喜んで従う愚昧なフランス人をこけにする芝居をもくろんだわけである。こうしてセリーヌは饒舌な香具師へと変貌する。

ことばに妥協をさし挟まぬセリーヌは同胞に最後通牒を突きつける。つまり今度戦争がおこったならば，勝敗にかかわらず，フランス人は消滅し，祖国は無に帰すだろうということである。セカンスによっては真摯に語られるこの予

測も，作者が香具師の顔をのぞかせるときは，冗談のすぎるトーンに彩られる。その最たる例がつぎの戯れ歌であろう——

> おつぎのやつ〔＝戦争〕でおしまいさ！/しまい！ しまい！ しまいさ！/お国をあげて自殺だぜ！/しまい！ しまい！ しまいよ！/習ってみてもさっぱりで！/しまい！ しまい！ しまいさ！/列車にゃマヌケが満杯さ！/しまい！ しまい！ しまいよ！/故郷に帰れるみこみなく！/しまい！ しまい！ しまいさ！/底抜けアホの死体ども！/しまい！ しまい！ しまいよ！/楽しいいくさのやりなおし！/しまい！ しまい！ しまいさ！/今度は楽しく！ 笑いなよ！ ほれ！/しまい！ しまい！ しまいよ！ [91–92]

過去に無数の死体の山を築いたにもかかわらず，あきれるほど無理解な同胞はなおも自殺行為に精を出す——これまでに示したフランス人にたいする憤懣やるかたない思いがみごとに凝縮された歌である。リフレインにもちいられた2つの俗語«Gnières»と«Gnons»には，冒頭の「おしまいさ la dernière」との押韻を考慮した訳語をあてたが，本来はそれぞれ「愚か者」と「殴打」を意味する。このことからも，芝居小屋の前で「愚か者」のフランス人を「殴打」するジェスチャーをまじえながら，彼らの神経を逆撫でしつづける香具師の姿が鮮明に浮かびあがるのではないだろうか。ばかばかしい内容とたたみかける口調の両面において，香具師セリーヌのテクニックは上記引用文にほとんど集約できるといってよい。

しかしながらこの香具師はみずからの特徴によって袋小路に陥らざるをえない。それは彼と他者との関係を考えるとあきらかになる。どんなに他者の説得への諦念をいだいていたとしても，香具師は少なくとも通行人の関心を引かなければならない。そのためセリーヌは皮肉の意味をこめた情け容赦ない毒舌をまき散らしたわけだが，それはファシスト作家リュシアン・ルバテでさえ困惑を隠せなかったように[13]，あまりにも常軌を逸するものであった。このような口上をがなりたてる者はいずれ飽きられ訝しがられるだけであろう。ここで『夜の果てへの旅』の一場面が思いおこされよう。縁日の射的場がバルダミュに戦場で無意味に殺される恐怖を喚起し，彼を狂気におとしいれた直後のできごとがそれだ。バルダミュは周囲のすべての人々が銃撃されるのを待ちかまえているという妄想にとらわれ，大声で逃走をうながすが，当然のことながら嘲

りと哀れみの視線を向けられるだけであった[14]。『死体の学校』の香具師は，6年前にベストセラーとなった出世作の主人公がとった行動を激しく執拗に敢行したといえるのではないか。それは観客も他の出演者もほとんど得られない一人芝居なのである。

セリーヌは仮想的な読者を登場させ，「こんな思いあがったふるまいは終わりにしねえか？ 受けをねらって詭弁ほざくのは？」[283] と語らせた。他者を笑いとばしても他者からは相手にされず，ただ軽蔑されること。道化を生業とする香具師にとって避けようのないこの宿命をセリーヌは甘受し，極限まで体現した。そうすることで彼は，逆説的ではあるが，あらゆる他者に対峙する堅牢な個としての存在を確認したかったように思われる。香具師セリーヌは敗残者の強がりと誇りを主張してやまない——

> 全人類を糞ミソにしてやるぜ，俺のすさまじい後ろ盾，とてつもねえキンタマ1組駆使してな（てやんでぇ証拠を見せてやらあ！）しゃべり散らして，けりをつけ，得意満面，才気煥発だらけの頁にしてやる……〔…〕
> わがライバルどもは，わがちっぽけな弟子たちさえも，気のめいる，不愉快きわまりないことをほざいて私を殺したがってるだろうな，群なすゴキブリにかみつかれ，とんでもねえゴロツキで，殉教食らいのうじゃうじゃ繁殖した毒蛇の毒でくたばっちまえと思ってるだろうよ。ところがこの冷酷頑固な心が私を守ってんのさ，だからここまで逃げのびてきたんだ。[213–214]

*

論理的であるべき医者のことばと非論理的な香具師のたわごととは本来相いれないはずであるが，セリーヌは後者が前者を浸食するかたちで両者を同居させた。その結果，『死体の学校』は信憑性に乏しい反面[15]，「ふしぎな，胸のむかつく，突拍子もないポエジー」[16] を醸しだすことに成功したのである。小説創造のはざまで踏みこんだパンフレ執筆の経験は，彼にドイツからデンマークへの逃避行や戦犯裁判などの高い代償を支払わせたものの，時代のまがまがしさを敏感にとらえ，それに合致した言語を紡ぎだす絶好のトレーニングであったといえよう。じじつ，「幻視するこの私は」[136] と述べた作家の自負心が第2次世界大戦後の小説に顕著な黙示録的ヴィジョンの創造にかかわっていく

のである。それら後期セリーヌ作品を研究するうえでも，パンフレは無視してよい資料体ではないことをつけくわえておきたい。

本稿で検討した2つの想像力のうち香具師のそれは，『死体の学校』の出版段階では構想されていなかった最終誹謗文書『苦境』[17] においていっそう深化するのだが，この作品を中心とする考察は稿を改めて論ずることにしよう。

註

1）Louis-Ferdinand Céline, *L'École des cadavres*, Paris : Denoël, 1938. この作品からの引用は拙訳で，頁数のみを［　］内に示す。なお和訳にあたっては，長田俊雄訳『死体派』，国書刊行会，1980年を参照した。

2）Voir la lettre à Évelyne Pollet, du 15 septembre 1938, in *Cahiers Céline 5*, textes réunis et présentés par Colin W. Nettelbeck, Paris : Gallimard, 1979, p. 199. 引用文中『戯言』は正確には『皆殺しのための戯言』(*Bagatelles pour un massacre*, Paris : Denoël, 1937) である。

3）『皆殺しのための戯言』は反ユダヤ主義を基調としながらも，文学・芸術論，医療論，環境論といった多様なテーマをとりあげていたうえ，物語性のつよい導入部やロシア紀行，虚構小品であるバレエ台本3編などを含んでいた。このような雑多な要素は『死体の学校』ではほとんど姿を消し，国際情勢とからめたユダヤ問題がより直接的にとりあつかわれている。また『皆殺しのための戯言』の特徴のひとつである新聞・週刊紙など出版物からの引用は，大幅に減少したものの，『死体の学校』でも踏襲された。なお『皆殺しのための戯言』における文学論については，拙論「たわごとの文学論――セリーヌのパンフレ――」，『ステラ』第16号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1997年7月，43-57頁を参照されたい。

4）Frédéric Vitoux, *La Vie de Céline*, Paris : Grasset, 1988, p. 326.

5）たとえば「俺はヒトラーと同盟を結びたいくらいさ」という表現があげられよう。このことばが，ヒトラーのための戦争をするのではなく，彼に対抗してユダヤ人のための戦争をしないようにする目的で述べられた点に注意しなければならない。Voir *Bagatelles pour un massacre*, op. cit., p. 317.

6）セリーヌの小説のなかで医者でない主人公が登場するのは，この職業をこころざす以前の従軍体験をモチーフとした『戦争』だけである。『なしくずしの死』と『ギニョルズ・バンドⅠ・Ⅱ』も作家の青少年期を題材としているが，すでに医療にあたっている主人公が過去を回想する形式をとっているため，とりわけ導入部において医者としての考察が見いだされる。さらに中・後期の『またの日の夢物語Ⅰ・Ⅱ』と「ドイツ3部作」(『城から城』『北』『リゴドン』) では，著者名がそのまま

小説の主人公名としてもちいられているため，自伝と虚構の区別がいっそうあいまいになり，医者の語る体験談という体裁が鮮明になっている。

7）主人公バルダミュは歯槽膿漏のひどい司祭を観察したのち，こう語る――「ひそかにこういう仔細な観察をするのがおれの癖ってより趣味だった。語群が組みたてられ発音されるたとえばそのようすに注意してみると，われわれのことばはその唾にまみれた惨憺たる舞台装置のおかげであらかた台なしにされちまう。会話の機械的な努力は排便よりよっぽど複雑で，骨が折れる。厚ぼったい花びらみたいな口が，身をよじって音を吐きだし，吸いこみ，めまぐるしく動きまわって虫歯の臭い柵越しにあらゆるたぐいの粘っこい音を押しだす，なんて刑罰だ！ こんなものを理想に置きかえろったって。容易なこっちゃない。しょせん生ぬるい腐りかけのはらわたの囲いにすぎない以上，われわれはいつまでたっても感情とは折りあえんのだ」(Louis-Ferdinand Céline, *Voyage au bout de la nuit*, in *Romans I*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1981, pp. 336-337. 高坂和彦訳『夜の果てへの旅』，国書刊行会，1985年，319頁，一部改変)。

8）モンタンドンについては，拙論「セリーヌの3つの〈バガテル〉」，『フランス文学論集』第32号，九州フランス文学会，1997年11月，13頁，註19を参照されたい。またセリーヌは『死体の学校』第76セカンスで，人種概念を否定するユダヤ人への反論としてモンタンドンの著作の一節を引用している。Voir *L'École des cadavres*, op. cit., pp. 225-227.

9）客観的に見ると，セリーヌがいうユダヤ人排除とナチスが実行したユダヤ人根絶とは紙一重の差しかなく，生物・衛生学を社会・人類学的分野へ応用したという点においてはなんら変わりはない。したがっていくらセリーヌに意図がなかったにせよ，彼がナチズムの教義を準備したひとりだといわれてもしかたがないであろう。またこの問題にかんしてセリーヌ擁護をこころみる人のなかには，たとえば彼を誤った生物学教義の犠牲者だとするアンドレ・リオレのように，倫理への抵触を考慮しすぎるせいか，いくぶん詭弁めいた論を展開する人が多いようだ。Voir André Lioret, «Une doctrine biologique», *L'Herne*, n°s 3 et 5, Paris : Éd. de l'Herne, 1963 et 1965 [éd. en un volume, 1972, pp. 381-382].

10）Paul Kingston, «Céline et l'antisémitisme de son époque : aspects de *Bagatelles pour un massacre*», in *Actes du colloque international d'Oxford 13-16 juillet 1981*, Paris : Bibliothèque de L.-F. Céline de l'Université Paris VII, 1981, p. 56. ただしキングストンは，キリスト教にユダヤ問題の解決を見いだそうとした反ユダヤ主義者たちとセリーヌとのあいだには大きな隔たりがあるとし，『死体の学校』における反教権主義が当時の反ユダヤ主義の典型ではけっしてないことに注意をうながしている。

11）セリーヌは『死体の学校』出版の翌月にある知人にあてた書簡で，「フランス人の4分の3がユダヤ人になってしまったことを理解するには残念ながら自分のまわりを見るだけでよい。かくも金銭ずくで，かくも下品で，かくも無気力で……」と記

している（lettre à René Torwarth, décembre 1938, in *L'Année Céline 1992*, Tusson : Éd. du Lérot / Paris : IMEC, 1993, p. 81）。また彼はじっさいに「シャイロックの千一夜物語」[72] という表現を使っているのだが，いうまでもなく拝金主義者としてユダヤ人をとらえることは反ユダヤ主義のステレオタイプである。

12）セリーヌが「ユダヤ人」という語の意味を拡大して使用したことはすでに述べたが（前掲拙論「たわごとの文学論――セリーヌのパンフレ――」，55 頁，註 18），そのなかには，純粋なアーリア人ならぬ雑種，ユダヤ化したアーリア人も含まれている。この点にかんしては，シャルル・モーロンの方法論にのっとって，パンフレを対象に「個人的神話」としての「ユダヤ人」の意味論的場をたどったアルベール・シェスノーの考察がくわしい（voir Albert Chesneau, *Essai de psychocritique de Louis-Ferdinand Céline*, Paris : Lettres Modernes, 1971, pp. 6–54）。

13）ルバテはつぎのように述べている――「正確を期すため私はさらにいわなければならない。われわれファシストが 1938 年に『戯言』のまわりで戦舞を踊ったとしても，1 年後の『死体の学校』はわれわれの手足を折った。〔…〕われわれのなかでさえ，こういう悪魔にとり憑かれた男について一言たりとも印刷することは不可能だった。われわれは少々憂鬱になって，そもそも彼はくりかえして冗漫に述べているのだと結論し，私も同意した，この嵐に喜びの叫び声をあげたにもかかわらず」（Lucien Rebatet, «D'un Céline l'autre», *L'Herne*, n°s 3 et 5, op. cit., p. 231）。

14）*Voyage au bout de la nuit*, op. cit., pp. 58–60.

15）たとえばベルギーのファシスト系週刊誌「レックス」の記者セルジュ・ドリングはセリーヌに同意しながらも，彼の行為が結局はむだで，狂人扱いされるのがおちだろうと書評をしめくくった。またセリーヌ自身，『死体の学校』の再版によせた序文で，初版刊行時この作品がまったく反響をよばなかったことを述懐している。Voir Serge Doring, *Un Règlement de comptes (L'École des cadavres)*, Bruxelles : Van Bagaden, coll. «Céliniana 22», 1991, p. 9 (initialement paru le 9 décembre 1938 dans *Rex*) ; Louis-Ferdinand Céline, *L'École des cadavres*, nouvelle édition, Paris : Denoël, 1942, p. 11.

16）Henri Guillemin, «*L'École des cadavres* de L.-F. Céline», *La Bourse égyptienne*, 19 février 1939, reproduit dans *Les Critiques de notre temps et Céline*, présentation par Jean-Pierre Dauphin, Paris : Garnier Frères, 1976, p. 91.

17）Louis-Ferdinand Céline, *Les Beaux draps*, Paris : Nouvelles Éditions Françaises, 1941.